



静岡県立
伊東高校

成績層別指導

生徒の意欲を刺激する 成績層別の課題と補習で 学力底上げを実現する

◎「自律・創造・敬愛」を校訓として、豊かな感性、確かな知性、健やかな心身を育成し、開かれた学校づくりを目指す。1学年5クラス編成で、国公立大を目指すP(プレパトリー)コース1クラス、私立大・短大・専門学校・就職を目指すC(コンプリヘンシブ)コース4クラスから成る。

設立	1933(昭和8)年
形態	全日制・定時制／普通科／共学
生徒数	1学年約200人
09年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、茨城大、静岡大、浜松医科大、釧路公立大、秋田県立大、高崎経済大、首都大学東京、静岡県立大、宮崎公立大などに20人が合格。私立大は、慶應義塾大、日本大、東京理科大、法政大、明治大、立教大、同志社大、関西学院大などに延べ225人が合格。
住所	〒414-0055 静岡県伊東市岡入の道1229-3
電話	0557-37-8811
Web Site	http://www.shizuoka-c.ed.jp/ito-h/

変革のステップ

背景	実践	成果
<p>◎入学段階での成績上位層の流出や入学定員割れにより、成績中下位層の生徒が増加</p> <p>STEP 1</p>	<p>◎成績層別の課題や補習で自信を持たせ、成績上位層の友だちをチューターとする制度で意欲を高める</p> <p>STEP 2</p>	<p>◎成績下位層が減少し、中上位層が増加。生徒同士が自律的に学び合う雰囲気が生まれる</p> <p>STEP 3</p>

定員割れを乗り越え
国公立大合格者が3倍に

静岡県立伊東高校が2005年度の高校入試で初めて定員割れとなったことは、同校の教師に大きな衝撃を与えた。

同校のある伊東市は、伊豆半島東海岸の中ほどにある温泉で有名な町だ。学校までは、東海道本線の熱海駅から電車とバスを乗り継いで約40分かかる。東海道本線から離れた場所にあることが、それまで地域の優秀な生徒を確保する機能を果たしていた。しかし、少子化に加え、交通事情の変化や他地域の進学校の共学化などの影響により、次第に成績上位層の流出が目立つようになった。そして、ついに初の定員割れという事態となったのだ。

しかし、そのことがかえって、「自校を選んで入学してくれた生徒のために頑張ろう」という教師の熱意を巻き起こした。進路指導主事の釜谷和宏先生は、当時を次のように振り返る。

「定員割れとなった学年は、学力が低いことの深刻さに加え、服装やあいさつなどの容儀・礼儀面でも課題がありました。そこで、経験が豊富な教師で担任団を組織し、学年が一丸となって、生徒指導を徹底し、提出物は必ず出させ、補習を充実させるなど、生徒が学びに向かう姿勢をつくることに注力しました。その結果、卒業時には国公立大に58人が

合格するという、例年の3倍近い実績を上げることが出来たのです。このことは、後輩の生徒たちはもちろん、指導に当たった教師にとっても『やればできる』という大きな自信になりました」

しかし、成績上位層の指導がうまく実績に結び付いた反面、中下位層の指導が手薄になり、中堅私立大の合格者数が伸び悩むという課題が残った。そして、その総括がなされた直後の08年度高校入試で、再び定員割れとなる。2学年主任の塚本裕之先生は次のように述べる。



静岡県立伊東高校
釜谷和宏 Kanatani Kaushiro
教職歴34年。同校に赴任して6年目。進路指導
主事。「自分を粗末に扱わない」



静岡県立伊東高校
稲葉渉 Inaba Wataru
教職歴15年。同校に赴任して5年目。進路課。「生徒たちが自律的な進路決定が出来るよう支援していきたい」



静岡県立伊東高校
塚本裕之 Tsukamoto Hiroyuki
教職歴13年。同校に赴任して8年目。2学年主任。「唯一無二の高校生活を今出来るベストで支援したい」



静岡県立伊東高校
野田正人 Noda Masato
教職歴9年。同校に赴任して4年目。2学年担任。「生徒と共に学び、高めていけるような教師でありたい」

「08年度の入学生は成績中下位層が更に拡大し、学力的には05年度入学生以上に厳しい状況でした。今までと同じ指導では、結果は見えていました。上位層を更に伸ばすことと併せて、中下位層の底上げを図る指導が必要だと考えました」

毎日最低約30分の自習を課し まずは学習習慣を定着させる

08年4月、1学年団の挑戦が始まった。まず留意したのは、学習習慣の定着だ。4月に実施したスタディサポートから「過年度と比較して学習習慣が身に付いていない生徒が多い」という状況が見えてきた。まずは高校生として必要な学習習慣の確立が急務であると考え、6月、成績下位層を対象に「放課後自習アワー」を行った。定期考査の3教科(2年次からは5教科)の総合偏差値42を下回った生徒を、放課後に一つの教室に集め、その日の授業の復習をさせるという取り組みだ。

期間は定期考査後の2〜3週間で、木曜を除く週4日。部活動に支障がないよう、放課後の清掃は免除、運動部加入者は30分、文化部(週1回の部活)加入者は1時間とした。復習に使うB4判のプリントには、自分が自習に選んだ教科名(国数英理地歴公)と、その日の授業の反省を5段階評価で記入する欄だけを印刷し

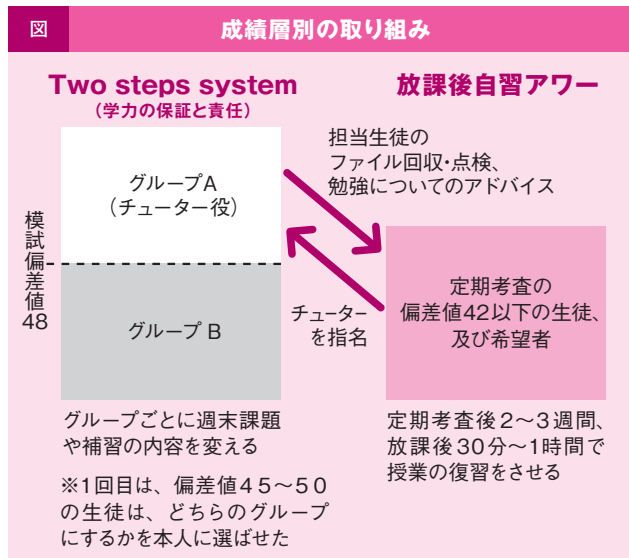
た。生徒は科目を自由に選び、ほとんど白紙に近いプリントの両面を使って自習する。自習を終えた生徒は、監督の教師に提出し、教師はそれをチェックしファイリングする。

「私たちは、このプリントだけで生徒の学力がすぐ上がるとは考えていません。学習習慣が未定着であるこの層の生徒に、まずは机に座って集中して勉強する姿勢を身に付けさせたいと考え、この形式にしました。また、復習プリントというと、問題と解説があるものをイメージしがちですが、それでは教師の負担が増えるばかりです。取り組みを続けるために、出来るだけ負担をかけずに教材を作りたいと考えました」(塚本先生)



「放課後自習アワー」を欠席する生徒はほとんどいない。補習や追試で欠席する場合は、自宅でプリントに取り組み、翌日に提出する





**模試結果を基にした生徒による
グループ選択で全国に目を向けさせる**

上位から下位まで幅広い成績層への対応も、大きな課題だった。教材や課題、補習は成績中下位層を中心にレベルを設定しなければならず、難関大を志望する成績上位層を伸ばすには難があった。そこで、1年次の11月に始めたのが「Two steps system(学力の保証と責任)」だ。目標の異なる二つのグループを設置し、生徒は模試偏差値を基準に所属したいグループを自ら選択し、教師はそれぞれに合った課題や補習、情報提供を行うことにした(図)。

1回目は1年生7月模試の結果を基に、国数の総合偏差値で、学年全体を上中下の3つに分けた。そして、上位層はA、下位層はBへ振り分け、偏差値45〜50の中間層はA/Bいずれに所属するかを、生徒自身に選ばせた。

2回目は1年生1月模試の結果を受けて2年生になる4月に、3回目は2年生7月模試を受けて9月に行った。グループBの生徒がグループAに入るには、偏差値48を超えることが条件となる。逆に、グループAの生徒は偏差値48を下回ればグループBとなる。ただし、グループAとなっても、課題が難しいと感じたらグループBを希望することも可能だ。

グループ分けの基準を模試偏差値としたのは、全国に目を向けてほしいという思いからだ。進路課の稲葉渉先生は、次のように説明する。

「本校には素直でおっとりとした生徒が多く、将来の高い展望や競争意識を持ちにくい傾向があります。全国模試の成績に目を向けず、ともすれば定期考査や校内テストの結果だけで満足してしまう。そして、3年生になって初めて大学入試の厳しさを知り、第1志望をあきらめる生徒が多くなりました。全国模試の偏差値を基準とすることで、早い時期から視野を広げ、目標を高く持たせ、一つ上の進路を目指す意識を養いたいと考えました」

グループごとの目標も明示した。グループAは地元の静岡大を中心とした国公立大、グルー

プBは日東駒専(*)などの中堅私立大を、志望校に掲げた。

「自分には学力的に無理だと思い込み、志望を下げがちな生徒に、具体的に目標とする大学を示すことで、『行けるところに行く』のではなく、上を目指す意識を持たせようとなりました」(塚本先生)

**グループ分けにより
指導の焦点化が進む**

グループ制は、あくまで教師が提供する課題や情報を絞り込むための区分であり、習熟度クラスのような縦割りのシステムではない。補習などでグループごとに活動する場面はあるが、普段の授業やLHRは学級単位で行う。

グループの違いが最もよく表れるのは、週末課題だ。例えば、最初のグループ分け直後に出した英語の週末課題では、グループAは長文読解問題、グループBは単語の暗記を課し、翌週火曜日に行った週末課題テストはA/B共通の問題で、Bに暗記させた単語から出題した。グループBの生徒は週末課題にきちんと取り組んでいれば、グループAの生徒より点数が取れるので自信になる。グループAの生徒には語彙力の必要性を自覚させることで、主体的な学びにつなげようという狙いだ。また、追試の設定もグループで異なる。グループAは主体性を養うた

*日本大(日)、東洋大(東)、駒澤大(駒)、専修大(専)を示す

めに追試をしないが、グループBは強制的にも定着させることが重要なので、追試を行う。

夏休みや冬休みの補習は、様変わりした。それまでは、各教科が「国語基礎」「数学基礎」など講座を設定し、希望者のみが補習に参加していた。「Two steps system」の導入後は、冬休みの補習は原則として全員出席とし、グループAは進学補習、グループBは自習（冬休みの宿題）が課されることになった。

グループAは2クラスを設定し、国語と英語の補習を交互に行う。教師は各教科1人で足りる上、講座を設定して募集をする必要がなくなったので、負担が減った。

「補習期間中は毎日SHRを行いました。生徒全員が登校して補習や自習に取り組みることによって、学年の一体感が強くなったと感じています」（稲葉先生）

友だちをチューターにし 互いに学び合い、意識を高め合う

生徒が互いに学び合い、意識や学力を高め合う工夫も凝らしている。

「放課後自習アワー」を始めてから、生徒の学習力が上がりました。しかし、自習プリントの内容を見ると、学習方法が悪い、内容が薄いとといった粗っぽさが見られました。量だけで質が伴わないのでは、学力は底上げさ

れません。そこで、成績上位層の生徒が下位層の生徒を指導することで、生徒同士が互いに高め合い、成績下位層の底上げを図る狙いで、『学年チューター制』を2年生になってから始めました」（塚本先生）

「放課後自習アワー」の参加が決まった生徒に、「チューター希望確認用紙」を配布。翌日までにチューターになってもらう友だち（グループAの生徒に限る）を探し、了承の直筆サインをもらう。チューター1人に対して、最大2人まで自習対象者を付けることが可能だ。

「学年チューター制」は、「放課後自習アワー」と「Two steps system」をつなぐ役割も担う。グループ制導入時に最も懸念されたのは、グループAとBの生徒の意識が乖離してしまうことだった。そこで、グループAの生徒にはチューターを引き受けることを所属条件とし、グループBの生徒が自らチューターを選ぶことで、グループ間の意識の壁を取り除こうと考えた。2学年担任の野田正人先生は次のように話す。

「自習対象者はチューターからアドバイスを受けることで、効果的で効率的な学習方法を体得できます。チューターは友だちに頼りにされることで、自己効力感を高め、また友だちに教えることによって自分の不足部分に気付きます。07年度の大学入試で実績が伸びた時も、生徒が学び合い、教師はそれを見守るといふ雰囲気がありました。3年生に向け

て自律的に学び合う雰囲気を醸成できれば、『受験は団体戦』を実現出来、1年後の入試でも良い結果が得られると期待しています」

「放課後自習アワー」でのプリントの回収やファイリングを、チューターに行わせることで、教師の負担軽減にもつながっているという。

生徒の学習力は向上 他学年への波及が課題

改革から2年がたち、成果はスタディサポートや進研模試の結果に表れている。グループAの生徒が順調に増えているのも、全国模試の偏差値を意識させる指導の成果だろう。

課題は、一連の取り組みが現2学年のみにとどまっていることだ。今後、いかに全校に波及させていくかが、安定した実績を上げるためにも不可欠になる。ただ、教師が求めているのは進路実績という「数値」だけではない。

「大学進学実績はもちろん大切ですが、それ以上に重要なのは、この過程を通して、生徒が目標に向けて頑張ることの大切さ、友だちと支え合う素晴らしさを体験することです。私たち教師に出来るのは、生徒に目標を意識させ、生徒同士が学び合う雰囲気をつくることくらい。生徒が可能性を信じて高い目標に挑戦出来るよう、入試本番までの1年間、生徒を支え続けたいと思います」（塚本先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトをご覧ください。

2009年12月号特集「学力下位層の拡大にどう向き合うか」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)